

# 1 現職教育計画

## (1) 研究主題

**「主体的な学習態度の育成」**  
～ 表現力、活用力の向上と言語活動の充実を通して ～

## (2) 主題設定の理由

〈今日的教育課題から〉

- 「生きる力」をはぐくむことを目指す。
- 基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させる。
- 課題解決するために必要な思考力・判断力・表現力をはぐくむとともに主体的に学習に取り組む態度を養う。
- 言語活動の充実
- 家庭学習習慣の確立

〈教育目標具現化から〉

- 【教育目標】  
「知性」「品格」「至誠」「体力」を身につけた活力ある生徒
- 【重点目標】  
目標達成のために、自ら行動できる

〈生徒の実態から〉

- 落ち着いた授業態度であり、与えられた課題には一生懸命に取り組むことができる。
- 授業改善や学力向上に向けての取り組みにより、全体的な学力は向上している。
- 上位生徒は、検定試験などにも積極的に取り組み意欲的に学力向上に励んでいる。
- 基礎的基本的な学力を身に付けていない生徒がいる。
- 自分の考えをまとめたり、積極的に発表したりする生徒が少ない。
- 家庭学習の習慣化が不十分な生徒がいる。

〈前年度の研究から〉

- 課題に合わせて班での話し合い活動を取り入れ、考えを練り上げたり他の意見と比較してまとめたりすることができた。
- 課題提示、発問、ワークシートなどを工夫することで、主体的な学習態度の育成につながられた。
- 既習事項の確認の積み重ね、基礎的な体験の繰り返しなどを通して、自分の考えに自信を持てるようになった。
- 考えをまとめる力、表現力、発表力は更に向上させたい。
- 習熟度の差が大きく、特に下位生徒への対応に課題が残る。
- より主体的な学習態度を育成するには更なる基礎学力の向上が不可欠である。

これらのことを踏まえ、本主題を設定した。

## (3) 研究仮説

基礎・基本を踏まえて表現力、活用力を試す場を設定したり、言語活動を充実させるための個に応じた支援を充実させたりすることにより、内発的学習意欲が喚起され、主体的な学習態度を育成することができるであろう。

## (4) 本年度の具体的研究内容・方法

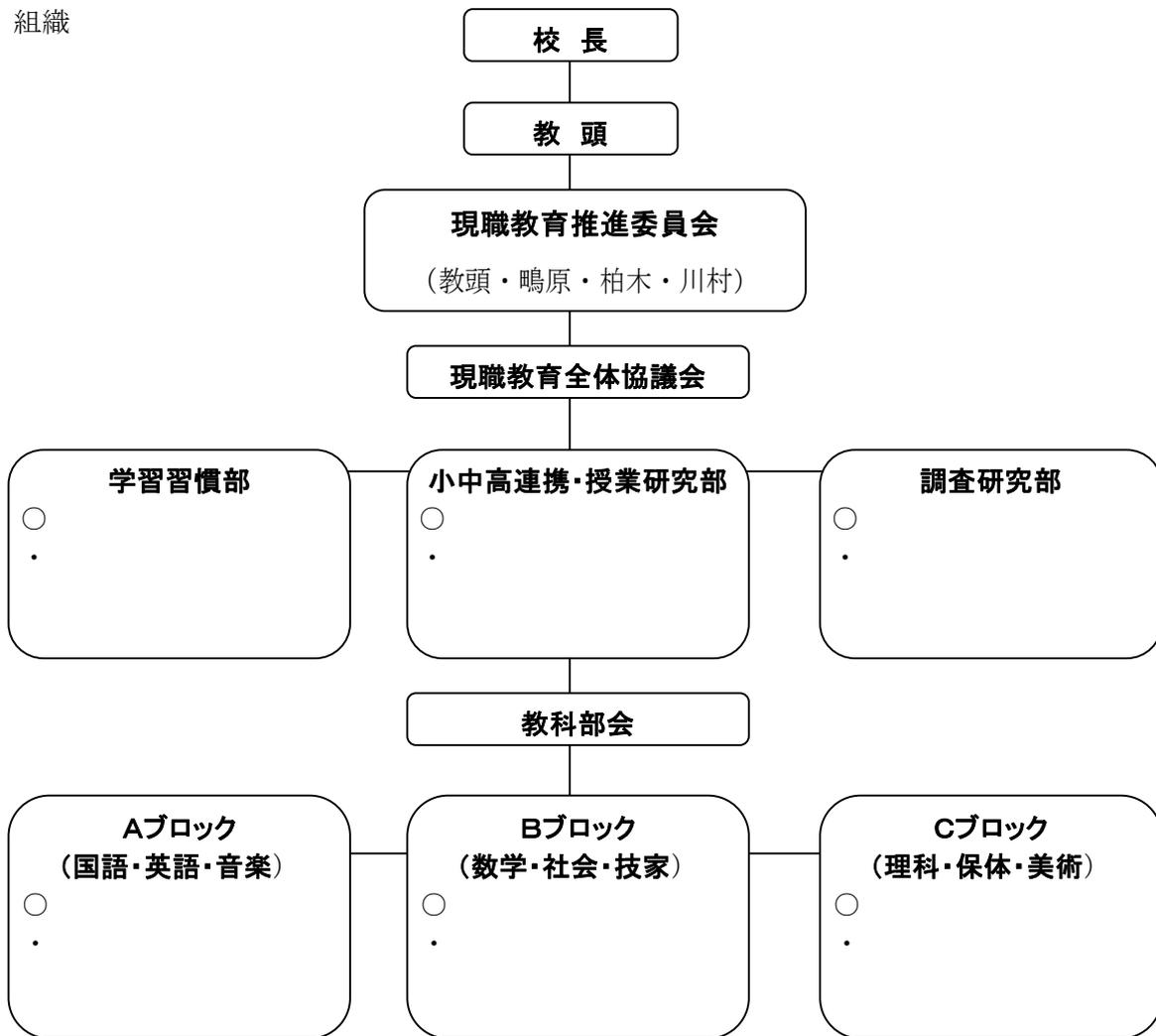
- ・ 全国学力検査、県学力調査、市学力コンテストなどから、生徒の学力の実態をとらえる。
- ・ 研究主題をもとに、各教科ごとに具体的実践事項を設定し、主体的な学習態度の育成に向けて具体的な手立てを工夫する。またそれに基づいて個人研究を深め実践する。
- ・ 各教師は、各教科の実践事項に基づき、具体的な単元（教材）を明らかにして研究実践する。
- ・ ブロックごとの研究授業を実施し、教師相互の実践交流を図る。
- ・ 研究授業の際は研究テーマに沿った授業実践の構想を明らかにし、具体的な工夫や指導の手立てを明らかにして、指導過程に位置づけて授業を実践する。
- ・ 研究授業事前研究では、研究テーマに沿って授業の視点を設定し、授業、事後研究により研修を深める。
- ・ 研究のまとめを行う。

**(5) 研究推進計画**

時期	具体的な推進内容	
4～5月	全体協議会 ブロック・教科部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 研究主題、研究計画についての検討</li> <li>・ 全職員の共通理解</li> <li>・ . . . .</li> </ul>
1～3月	推進委員会 全体協議会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 全体協議会の持ち方</li> <li>・ 主題研究の成果、及び今後の課題の整理</li> <li>・ 次年度の課題、研究主題、研究計画の検討</li> </ul>

**(6) 研究体制**

① 組織



② 役割

<b>推進委員会</b>	研究の企画・立案、理論研究、仮説の研究、資料の収集
<b>学習習慣部</b>	家庭との連携、学習訓練、学習環境の整備
<b>授業研究部</b>	授業研究計画と検証、指導案の研究・改善
<b>調査研究部</b>	各種調査の計画・統計・分析

## 2 研究実践の内容

### (1) 各教科の授業の中での実践事項

「生徒主体のわかる授業づくり」を目指し、主に次の4つの視点から様々な実践に取り組んだ。日々の授業、研究授業（経験者研修、初任者研修、小中高交流事業など）、ブロック研究授業などで、それぞれの視点から実践した内容は以下の通り。

#### ア 学びの意味づけ、内発的学習意欲の喚起

- ・視聴覚機器の効果的活用  
（プロジェクター、電子黒板、DVD、書画カメラ、モニター、パソコン、iPad、大型テレビ、掛図など）
- ・既習事項の確認、実態把握、レディネステストの実施
- ・実践的、体験的な活動の工夫と機会の設定
- ・身近な素材、事物・現象を材料として活用
- ・基礎的・基本的内容の精選と発展課題の準備

#### イ 生徒主体の課題設定、課題解決の方法や場の設定の工夫

- ・資料から読み取った内容を自分の考えにつなげる活動の反復
- ・教師主導型の展開ではなく、生徒自らの考えを活用した学び方、練り上げ方の工夫をした授業展開
- ・習熟度別に、基本の繰り返しや発展問題への挑戦などの選択ができるまとめの時間の確保
- ・個→(ペア)→班→全体の発表の流れを重視した発表ボードの活用と役割分担の工夫
- ・学力差に左右されない、記入しやすいワークシートの作成
- ・ワークシートやホワイトボード、黒板を活用し、生徒が受け身の学習にならない授業の展開
- ・精選された簡潔な中心発問、深めるための補助発問の準備
- ・聞く、書く、話す、考える・・・多様な活動場面の設定と明確な指示

#### ウ 表現力、活用力の向上をはかるための指導方法や指導形態の工夫

- ・作文を生徒が相互批正し、他者の表現技術にふれる機会を確保
- ・資料活用を通して、理由や根拠のある考えを持たせる工夫
- ・ワークシートやノート作り（板書計画）の工夫、発問内容や評価方法の充実を通じた科学的思考能力の育成
- ・楽譜の読みとりや鑑賞における作曲者の意図の理解学習
- ・家庭学習と各教科の宿題の連携

#### エ 言語活動を充実させるための指導方法や指導形態の工夫

- ・初発の感想や、まとめ段階での条件作文を定期的にかかせ、文章表現活動の苦手意識を払拭
- ・生徒が考えることができるような仕組みづくりや生徒が何をどのように考えれば良いのか見通せる声掛け
- ・基本英文を使用し、自分の伝えたいことを自由に表現させる場面の多様化
- ・鑑賞活動を通じた他の作品の良さを認め合う場の工夫
- ・豆テストや漢字、計算、英単語などの反復練習
- ・ディクテーション（聞いて書く）訓練の継続
- ・班活動などを通じたリーダーの育成
- ・特別支援学級担当者との連携（1、2年）

○経験者研修、初任者研修、講師研修、小中高連携における授業研究

## (2) その他の取り組み

### ア 学習の手引き「年間シラバス」の作成

- ・各教科の授業の進め方、評価の方法、年間指導計画などをまとめた「学習の手引き～年間シラバス～」を作成して全生徒に配布し、教科初めのオリエンテーションなどで利用。

### イ 教科部会の開催

- ・月1回程度の教科部会の開催を設定した。議題を提示し、研究の推進、計画の確認などを行った。
- ・諸テストの結果の分析、対策の検討
- ・授業の流れ、テストや課題の実施の仕方、評価方法などの共通理解

### ウ 定着確認シートの活用

- ・各教科で、授業の進度や定期テスト、まとめの時期などに合わせて実施した。
- ・宿題や週末課題として活用した。
- ・定着率の低い問題を授業で解説したり、繰り返し解かせたりした。

### エ 教員研修

- ・先進校視察として、筑波大学付属駒場中・高等学校の教育研究会に参加し授業を見学した。

### オ 日産財団助成

- ・日産財団からの助成を受け、iPadを導入。理科の授業などを中心に生徒の学習環境、学習内容の質がより良くなるよう活用を図っている。

## 3 成果と課題

### (1) 各教科の授業の中での実践事項に関する成果と課題

#### ○成果

##### ア 学びの意味づけ、内発的学習意欲の喚起 について

- ・生徒の考えや疑問を課題設定につなげたり、資料提示、活用に工夫を持たせたりすることで生徒の学習意欲が喚起され、多角的・多面的に追求しようとする生徒が見られるようになった。
- ・生徒のレディネスを把握して、授業内容を生徒の興味関心のある身近な題材にすることで、内発的動機付けが高まった。
- ・視聴覚教材の活用が、興味関心の高まり、時間の効率的活用、知識定着につながった。
- ・互いに意見を発表したり、作品を掲示したりすることで、課題に対しての興味関心を引き出し、発表に対しての意欲付けができた。

##### イ 生徒主体の課題設定、課題解決の方法や場の設定の工夫

- ・毎時間、復習テストや教科書を読んで簡単な問題に答えるというような基本的な学習を積み重ねることで、主体的に学習に取り組むようになった。
- ・辞書を引く習慣づけは、多面的な考え方や発展的な課題へとつながった。
- ・ワークシートや板書事項を工夫することで、結果をまとめたり、グラフにしたりするなど、段階を踏みながら結果を適切に処理することができるようになってきた。
- ・既習事項の確認を積み重ねて授業を進められるよう、発問や課題提示を工夫することで、課題解決をスムーズに進め理解を深めることができた。

## ウ 表現力、活用力の向上をはかるための指導方法や指導形態の工夫

- ・定期的な文章表現の実施が苦手意識の払拭につながった。原稿用紙の使い方の指導もできた。
- ・自分の意見を持ち、表現する力を育てるためのペア学習やディスカッション、ディベート、プレゼンテーションなどを取り入れ効果があった。
- ・自分の意見をもとにペアや班で話し合い、全体に発表する活動を繰り返し行うことにより、考えを進んで表現しようとする力がついてきた。発表ボードも有効に活用できた。
- ・予想（見通し）→結果→考察（根拠）・・結論⇒新たな発見・疑問の定型化した流れを重視したノート作り（板書計画）を心がけて授業の流れを生徒達に定着させ、流れの中で個人の考えを深める場や時間を十分取れるように配慮したことで、表現力や活用力がついてきた。

## エ 言語活動を充実させるための指導方法や指導形態の工夫

- ・相互批評に前向きに取り組ませることで、徐々に語彙力が上がり、文章表現に向上が見られる。
- ・継続的に「書くこと」を重点的に課題に取り組ませ暗写により語彙力が向上した。
- ・資料やグラフの種類ごとに見出しをつけたり、変化の読みとり方を繰り返したりすることで、意欲的に資料を読み取り考えをまとめようとする姿勢が見られた。
- ・学習課題に沿ってグループ学習を取り入れることで、他の意見を参考にしながら自分の表現を練り上げたり、多様な意見が導き出したりすることができた。
- ・予想や気づき、考察やまとめなどを発表ボードに記入させ、少人数での話し合い活動の訓練を繰り返したり、ワークシートの効果的な活用を図ったりすることで、進んで話したりまとめたりしようとする習慣ができてきた。

## ●課題

- ・能力差が大きいため、相互批評などの場面では文章表現の修正点を指摘できない生徒も多い。さらに配慮したい。
- ・データを正確にグラフ化したり、複数の資料を関連づけたり、既習事項を組み合わせで説明したりする活用力がまだまだ弱い。
- ・グループ活動など学習形態の工夫には、まだ意見考案や話し合いの場を増やすなど改善の余地がある。
- ・個から少人数、全体へという意見発表の流れを重視しているが、個人の能力の差が激しく、なかなか多くの生徒の意見を吸い上げることができていない。
- ・班での話し合い、発表ボードへの記入など協力して行う学習作業を取り入れても、一部の固定化した生徒（上位）の意見に流されてしまい、なかなか活躍できない生徒がいる。
- ・結果や分かったことを自分の言葉でまとめる力、説明や発表をする表現力は不十分。このような力を育てるための手段と方法の工夫を継続していかななくてはならない。
- ・習熟度別の課題、ワークシートの工夫、発問の精選はまだまだ改善の余地がある。
- ・表現力、活用力の土台となる基礎基本の定着が不十分。どの教科でも基本となる知識や技能をしっかりと身につけさせる継続的な指導が必要。
- ・問題文が読み取り、単純な計算等ができない生徒の割合を減らすため、漢字や計算、英単語などの基礎的な力はさらに上を目指して高める必要がある。

## (2) その他の取り組みに関する成果と課題

### ア 学習の手引き「年間シラバス」の作成について

- 年度当初のオリエンテーションで活用し、1～3学年の学習の見通しをイメージさせることができた。各教科の学習の仕方や評価の方法などを具体的に生徒たちに伝えることができた。

- 今年度、学区内で行われている「つなぐ教育」推進事業の中でも、小中の学習習慣などを連携するために活用できる。
- オリエンテーションで活用後は家庭保管となっているが、どの程度活用されているのか不明。定期テストの日程も載っているが、見て確認している生徒（家庭）は少ない。家庭学習のやり方や内容に関するアドバイスなどをさらに具体的にすること、家庭での活用をより積極的に進めることなどが課題。

#### イ 教科部会の開催について

- 前年度から始まった取り組みであったが、研修計画の推進や確認、教科独自の指導方法や評価方法の話し合いをする場として有意義な時間となった。
- 経験年数の違う教員が同じ議題で話し合うことは、何よりの研修になった。それぞれの立場年齢によって得るものは違うが、貴重な意見交換の場になっている。
- 数名の教科部会とはいえ、放課後も部活動などで拘束される中学校教員にとって全員が集まる時間を確保するのはとても難しい。
- 見通しを持った記録の蓄積などがよくできなかった。

#### ウ 定着確認シートの活用について

- 授業内容の定着度合いの確認、繰り返し行うことでの基礎基本の定着、記述問題対策などに有効に活用できた。
- 年度を追うごとに活用の幅が広がってきている。
- 実施するための時間確保が最大の課題。教科内、学年間の連携を密にして活用の仕方を工夫したい。
- 学校全体で取り組む時間を確保するなど、教科の枠を超えた実施方法も検討していきたい。

#### エ 教員研修について

- 環境や目指す到達点が違っていても、目的を持ってひたすらに学業に励む中高生の姿を目の当たりにすることは大変貴重な経験になった。今回は少人数での短時間の参観だったが、多額の予算を組まなくてもこのような研修に参加できる機会が増えるとういと思う。

#### オ 日産財団の助成について

- ・日産財団から「理科教育助成」ということで助成をうけ、「子ども達の科学的思考能力が向上する教育方法の開発」に理科を中心に取り組んでいる。約2年間の取り組みで現在中間報告の段階。今年末の成果報告に向けより効果的な実践になるよう、学習活動に取り組んでいる。
- ・助成金でiPadを中心としたICT機器を導入し、理科の授業を中心に活用している。これまでできなかった学習形態などにも積極的に挑戦し、今年1年間の中で活用の場面を増やし成果を積みあげていきたい。そして、助成終了後も今回の実践が継続できるよう内容をしっかり蓄積していきたい。